

## 盲目の直観

——カント直観論への一考察——

岡村 信孝

「直観を欠く思想は空虚であり，概念を欠く直観は盲目である」(Gedanken ohne Inhalt sind leer, Anschauungen ohne Begriffe sind blind.) (A51/B75)

「凡ての直観は，意識のうちへと受け取られうるのでなければ，我々にとって無であり……」(Alle Anschauungen sind für uns nichts……, wenn sie nicht ins Bewußtsein aufgenommen werden können……) (A116)

『純粹理性批判』分析論で，カントが直観に対して与えた規定である。ここにカントの直観論解明の鍵が隠されているように思われる。上の文章・表現でカントは何を言おうとしたのだろうか。この点の究明を通して，カント直観論に一つの照明を当ててみたい。

### I

先ず，感性論の分析から始めよう。直観について，感性論では次の二面が区別される。一つは直観の純粹形式，あるいは純粹直観としての空間・時間であり，もう一つは経験的直観あるいは知覚である。

感性論の叙述で，以下の点が重要だと私は思う。(i) “直観の純粹形式” と言うとき，“直観” としては経験的直観，即ち知覚が考えられている<sup>(1)</sup>。しかもその際，相異なる多様な知覚の存在が前提されている。形式とはこれらの知覚を秩序づけ，関係づけるものとして理解されているのである。「現象の多様」(das Mannigfaltige der Erscheinung) とカントの言うとき，彼はこの意味での多様を考えている<sup>(3)</sup>。

(ii) この“多様” は空間・時間についても認められる。知覚の多様に対応するものは，空間・時間の「部分」(Teile)<sup>(4)</sup> であり，空間・時間はこれらの部分をそのうちに含むもの，部分から成る全体，総合的統一として捉えられている<sup>(5)</sup>。なお，現象及び知覚も，直観の形式に従って秩序づけられ，関係づけられるもの，即ち総合されるものとして捉えられている。

(iii) しかし他方で、空間・時間は本来部分から成るのではなく、部分に先立って、「本質的に一」(wesentlich einig)なるものとして根源的に与えられる、と考えられている<sup>(6)</sup>。部分は空間・時間の構成要素としてそれに先立って与えられるのではなく、ただ空間・時間の「制限」(Einschränkung)を通して与えられるにすぎない、と考えられている<sup>(7)</sup>。

以上から、感性論で“直観”として考えられているものを、次の形で取り出すことができるであろう。感性論に於いて“直観”の意味は多義的である。上の三点に対応して(但し順序は同じではない)、次の三つを区別することができる。

(1) 空間・時間は一切の制限・分割に先立って本質的に一なるものとして我々に根源的に与えられている。空間・時間のこの根源的所与性を“直観”は意味しうる。これを“直観Ⅰ”と名づけておきたい。

(2) 空間・時間の中で現象がその時々到我々に与えられ直観される。ここに第二の直観の成立が認められる。この直観を“直観Ⅱ”と呼んでおきたい。それはさしあたり現象の知覚を意味する。しかし、この直観とともに空間・時間が限定されたものとして与えられ把握されるから、直観Ⅱは限定された空間・時間の直観をも意味しうる<sup>(8)</sup>。いずれにせよ、直観Ⅱは互いに異なるものとして、この意味での多様性に於いて与えられる。

(3) ところで、現象・知覚が秩序づけられ結びつけられるのと同様に、空間・時間の部分も互いに結びつけられて全体を構成する。いずれの場合にも全体表象への総合が行われるのだが、少なくとも空間・時間については、この全体表象は直観である<sup>(9)</sup>。この総合的統一としての直観を“直観Ⅲ”と呼ぶことにしたい。

## II

分析論についてはどうだろうか。ここで初めて、概念を欠く直観は盲目だと言われる。「盲目」(blind)<sup>(10)</sup>とはここで、この直観が認識を与えないことを言う。認識は感性と悟性、直観と思惟・概念との統合・協働によって始めて可能であり、従って概念を欠く直観は、直観を欠く概念と同様に、まだ認識ではないと考えられているのである<sup>(11)</sup>。では、盲目の直観とは具体的に何を指すのだろうか。

さしあたり感性論の直観、即ち直観Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがそれだと私は思う。『純粹理性批判』の論述の流れから言って、当面こう取るしたないと私は思う。感性論でカントは直観を取り出すために、悟性機能・概念を「分離」(absondern)<sup>(12)</sup>した。これは感性論の直観(直観Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)凡てについて言える。悟性機能・概念の分離されたものとして、これらの直観はまさに分析論の言う“概念を欠く直観”であるのである。

感性論でカントは直観を、認識というよりはむしろその前段階、あるいは基礎として理解していたと思われる。ア・プリオリな総合的認識(例えば幾何学的認識)について、彼はその「可能性」(Möglichkeit)<sup>(13)</sup>を問い、空間・時間の直観を、それ自身ア・プリオリな

認識であるというよりはむしろその「原理」(Prinzipien)<sup>(14)</sup>であり、「そこからア・プリオリに様々の総合的認識が汲み出されるところの認識源泉(Erkenntnisquellen)<sup>(15)</sup>」(傍点筆者)であるというふうに理解している。純粹直観はア・プリオリな総合的認識であるというよりはその基底であるのである。<sup>(16)</sup>

また、この点に対応して、カントは空間・時間の直観を、その概念的把握に先立って成立するもの、従ってそれを含まないものと考えている。感性論では、特に空間についてそのことがはっきりと述べられている。空間の直観(但し直観Iが考えられている)は、空間についての凡ての概念に先立ち、その根底にある。<sup>(17)</sup>——直観IIIと概念との関係についてカントがどう考えていたかは、感性論を見るだけでははっきりしたことは言えない。しかし、第二版のカテゴリーの演繹の中で、彼は感性論を回顧しながら、空間・時間の直観(ここでは直観IIIが考えられている)は、空間・時間についての凡ての概念に先行する、と述べている。<sup>(18)</sup>

従って、感性論を下敷きにする限り、感性論の直観(直観I, II, III)は凡て“概念を欠く直観”として捉えられている、と言わなければならない。これらの直観は凡て、分析論の冒頭で、“盲目”と看做される。

しかし、このうち直観IIIについては問題が残る。上に見たように、この直観は多様の総合的統一として成立する。この統一は感性論では感性に属すると考えられていた。しかし、この考えは分析論に於て撤回される。

§10(第二版の節分けに従う)でカントは総合の問題を始めて主題化するが、ここで彼は認識の可能性を次のように説明する。認識を可能にする制約に三つあり、一つは感性による直観の多様の呈示、次に構想力による多様の総合、最後に悟性による総合の統一がそれである。このうち悟性は総合の統一を概念を通して行う。<sup>(19)</sup>——このカントの考えに従えば、空間・時間の直観(直観III)も、多様の総合的統一である以上は、必然的に悟性機能・概念を含んでおり、従ってそれは已に認識であるということになる。もっともカントはこの点を§10でははっきりと取り出しているわけではない。それが明確に述べられるのはカテゴリー演繹の中でである。<sup>(20)</sup>しかし、§10は演繹の議論を先取りした形で含んでいると言えるであろう。

もっとも、演繹論の中でも、直観の総合的統一について論じる際、カントは必ずしもこの統一が悟性、就中概念に基づくとはっきり述べているわけではない。単に「総合」(Synthesis)ないし「結合」(Verbindung)を取り出すだけの場合もあるし、あるいは精々悟性の働き、統覚の統一について述べるだけの場合もあって、<sup>(21)</sup>はっきりと直観の統一が概念に基づくとは述べているのは、むしろ例外的である。<sup>(24)</sup>しかし、§10で構想力の総合に統一を与えるのは概念である、とはっきりと述べられている以上、また一般に悟性はカントに於て概念・規則の能力として捉えられている以上、<sup>(23)</sup>直観の統一が一般に概念に基づくとはカントの考えていたことは間違いない。<sup>(24)</sup>

但し、ここで言う“概念”については注意を要する。それは空間・時間（の規定の仕方）について我々がもつ様々の概念（これが例えば幾何学的認識に於いて使用される）のことを言うのではない。この意味での概念については、直観Ⅰのみならず直観Ⅲもそれに先立つ、とカントの考えていたことを、我々は上で見た。特に直観Ⅲの先行性については、カントは演繹論の中で述べているのである。従って、直観（直観Ⅲ）が含む“概念”とは、上の意味での概念ではありえない。それは一般に（直観Ⅲとしての）空間・時間の直観そのものを可能にしている概念である。カントはこれを空間・時間表象の「産出」（Erzeugung）<sup>(25)</sup>の規則（カテゴリー）として理解している。具体的には、例えば等質性、量、外延性がこれに該当するであろう。<sup>(26)</sup>

こうして、直観Ⅲが単に感性に属するという感性論の考えは否定され、そこに本質的に悟性機能・概念の関与が認められ、直観Ⅲは“概念を欠く直観”、“盲目の直観”ではなく、それ自身已に認識であると認定される。従って、“概念を欠く直観”、“盲目の直観”としては、直観Ⅰと直観Ⅱとが残ることになる。

### III

では、経験的直観（現象の直観）についてはどうだろうか。経験的直観は感性論では知覚と等置されていたが、分析論、就中演繹論では、それはどう扱われるだろうか。

経験的直観は初版の演繹論で、悟性の総合機能に先立つものとして“単なる直観”（bloße Anschauung）<sup>(27)</sup>と呼ばれる。これは上に分析した“盲目の直観”に置換えることができる。では“単なる直観”とは何を意味するだろうか。

答は自明であるように見える。即ち、知覚（直観Ⅱ）がそれである。実際カントは、悟性の総合機能に対して感性は直観の多様を与えると言うが、その際“直観の多様”（das Mannigfaltige der Anschauung）という言葉で、様々の、あるいは異なる直観（verschiedene Anschauungen）、異なる知覚（verschiedene Wahrnehmungen）、多数の知覚（eine Menge der Wahrnehmungen）<sup>(28)</sup>を理解している。これが悟性によって総合統一されて経験が成立する、と彼は考えているのである。従って、“単なる直観”とは直観Ⅱ・知覚を意味する。

この解釈を一面では認めながらも、私は別の解釈を取る必要があると思う。

上述の理由から、“単なる直観”を直観Ⅱ・知覚と取ることは一応正当化されるであろう。しかし、その場合実は次の前提が要ということが見落されてはならない。即ち、直観Ⅱ・知覚が悟性の総合機能に先立って与えられる“単なる直観”であるためには、それは本質的に悟性の総合機能から独立でなければならない。なぜなら、もしそうでなければ、直観Ⅱ・知覚は実は予め悟性の総合機能の制約下にあることになり、従ってそれは“単なる直観”とは本当は看做されえないであろうから。

カントは直観II・知覚が悟性の総合機能から独立だと考えていただろうか。感性論に於いて、確かにカントは知覚を悟性功能から独立に、それに先立って成立するものと考えていた。演繹論でもこの考えは一応受け継がれているように見える<sup>(29)</sup>。しかし、次の箇所でも——ここでカントは演繹の結論的洞察を呈示するのだが——彼は上の考えをきっぱりと斥けている。直観IIIのみならず、直観II・知覚も本質的に悟性の総合機能（統覚の総合的統一）の制約下にあることを、カントは認めるのである。

「それ故、凡ての（経験的）意識の、一なる意識（根源的統覚）に於る客観的統一は、凡ての可能的知覚にとってすらその必然的制約である」（Die objektive Einheit alles (empirischen) Bewußtseins in einem Bewußtsein (der ursprünglicher Apperzeption) ist also die notwendige Bedingung sogar aller möglichen Wahrnehmung) (A123)<sup>(30)</sup>

従って、“単なる直観”を知覚と取る解釈を我々は採ることができないだろう。では、それをどう取るべきだろうか。手掛りはカント自身によって与えられている。

上の引用文へと導く一連の考察の冒頭で、カントは「我々に与えられる最初のもは現象である」と述べた上で、「知覚」を現象の直接意識として捉えている<sup>(31)</sup>。「意識のうちへの」現象の受納（Aufnahme）あるいは把捉（Apprehension）とも言い換えることができるであろう<sup>(32)</sup>。知覚が意識のうちへの現象の把捉と捉えられている点が決定的に重要である。しかも二重の意味で重要である。

先ず、カントは意識を本質的に統一的であり、かつ意識の統一は本質的に総合的であると考え、この意識の統一を“統覚の総合的統一”と呼ぶ。この意識のうちへと現象は把捉される。従って、現象を把捉する（知覚する）とは、同時にそれを何らかの仕方で互いに結びつけ統一することであり、この統一（総合的統一）なしには現象の把捉は不可能である<sup>(33)</sup>。現象の把捉（知覚）はこうして必然的に統覚の総合的統一の制約下にあるとされるのである。

他方、知覚が意識のうちへの現象の把捉であるということは、現象の所与性とその把捉とを区別することを必然的にすると思われる。現象の把捉は必然的に統覚の総合的統一の制約下にあり、従ってそれは思惟の自発的働きに属すると言える。しかし、把捉されるためには、現象は把捉されるべきものとして、予め我々に与えられ、「呈示」(darbieten)<sup>(34)</sup>されなければならない。現象のこの根源的所与性・呈示こそ感性に属し、それが“単なる直観”と呼ばれるのではないか。

感性と悟性の機能の分化を、カントが最終的にこういう形で考えていたことを示すテキストの箇所として、以下のものを挙げておきたい。

「我々に与えられる最初のもは現象であり、意識と結びついているとき、それは知覚と呼ばれる（何らかの、少なくとも可能的意識への関係を欠くとき、現象は我々にとって決して認識の対象とはなりえず、従って我々にとって無であるだろう、そしてそれはそれ自身では客観的実在性をもたず認識に於いてのみ存在するから、一般に無であるだろう）。」〔Das Erste, was uns gegeben wird, ist Erscheinung, welche, wenn sie mit Bewußtsein verbunden ist, Wahrnehmung heißt, (ohne das Verhältniß zu einem, wenigstens möglichen Bewußtsein, würde Erscheinung für uns niemals ein Gegenstand der Erkenntnis werden können, und also für uns nichts sein, und weil sie an sich selbst keine objektive Realität hat, und nur im Erkenntnis existiert, überall nichts sein).〕 (A119 f.)

「凡ての直観は、もし意識のうちへと受け取られえないとしたら、直接あるいは間接に意識に影響を与えようと、我々にとって無であり、我々にとって全く何の関係もない。意識を通してのみ認識は可能である。」 (Alle Anschauungen sind für uns nichts, und gehen uns nicht im mindesten etwas an, wenn sie nicht ins Bewußtsein aufgenommen werden können, sie mögen nun direkt oder indirekt darauf einfließen, und nur durch dieses allein ist Erkenntnis möglich.) (A116)

「凡ての表象は可能的経験的意識への必然的関係を有する。というのは、もしそうでなく、意識することが全く不可能であるとしたら、表象が全く存在しないと言うに等しいであろうから。」 (Alle Vorstellungen haben eine notwendige Beziehung auf ein mögliches empirisches Bewußtsein: denn hätten sie diese nicht, und wäre es gänzlich unmöglich, sich ihrer bewußt zu werden; so würde das soviel sagen, sie existierten gar nicht.) (A117Anm. Vorländerの読み方に従う)

「〈私は考える〉は凡ての私の表象に伴いうるものでなければならない。なぜなら、さもなければ全く考えられえないものが私のうちに表象されるということになるだろうから。しかしこれは表象が不可能、あるいは少なくとも私にとって無であると言っているのと異なる。」 (Das: *Ich denke*, muß alle meine Vorstellungen begleiten können; denn sonst würde etwas in mir vorgestellt werden, was gar nicht gedacht werden könnte, welches ebensoviel heißt, als die Vorstellung würde entweder unmöglich, oder wenigstens für mich nichts sein.) (B131 f.)

最後の二つの引用文の「表象」を直観と取れば（カント自身、最後の引用文のすぐ後ではそう取っている）、これらの文章は凡て同じことを言おうとしている。

一読して解るように、これらの文章で繰り返し現われる特徴的表現がある。(i) 直観と現象に関して「我々にとって無」(für uns nichts) とか「全く存在しない」(existierten gar nicht) という表現が使用される。(ii) 直観・現象と意識・思惟との関係が問題と

なり、その際「意識のうちへと受け取られうる」(ins Bewußtsein aufgenommen werden können), 「伴いうる」(begleiten können), 「何らかの、少なくとも可能的意識への関係」(das Verhältnis zu einem, wenigstens möglichen Bewußtsein), 「可能的経験的意識への必然的關係」(eine notwendige Beziehung auf ein mögliches empirisches Bewußtsein), 「それらを意識することが全く不可能」(gänzlich unmöglich, sich ihrer bewußt zu werden) といった様相表現が、上の文章の凡てで使われている。

上の引用文の凡てで、直観と意識(把捉・知覚・思惟)とは明らかに区別されている。

但し、ここで直観が「我々にとって無」だと言われている、と速断してはならない。もし意識のうちへと把捉されえない直観があるとしても、それは「我々にとって無」であると言われているだけであって、裏を返せば、意識のうちへと把捉されうる直観は我々にとって無ではないのである<sup>(35)</sup>。のみならず、意識のうちへと把捉されえない直観は「我々にとって無」だと言われている以上、我々にとっての直観とは、意識のうちへと把捉されうる直観しかない。我々にとっての直観をまさにこのように本質的に意識のうちへと把捉されうるものとして捉えているために、カントは直観に「可能的意識への必然的關係」(eine notwendige Beziehung auf ein mögliches Bewußtsein) を認めるのである<sup>(36)</sup>。

但し、ここでカントが直観を、已に意識のうちに把捉されているものとして捉えていると考えてはならない。もしそうだとすれば、彼はここで“直観”として知覚を考えていることになるだろう。しかし、カントはここで明らかに直観を知覚から区別している。直観はただ意識のうちへと把捉されうるものとして、あるいは可能的意識へと必然的に関係するものとして捉えられているだけであって、已に意識のうちに把捉されているもの(知覚)として捉えられているのではないのである。

ここまで分析すれば、カントが上の引用文の凡てで、直観と意識(把捉・知覚)とを区別していたことは明らかであろう<sup>(37)</sup>。直観はそれ自身はまだ意識のうちへと把捉されてはいない。従って、直観はまだ知覚ではない。しかし、それは本質的に知覚になりうるものとしてある。同様に現象についても、直観の対象である限りでは、それはまだ知覚されてはいない。しかし、それは直観に於いて根源的に与えられており、しかも本質的に知覚されうるものとして与えられている<sup>(38)</sup>。——これがカントの上の引用文での主張である。彼は一方で現象の根源的所与性・呈示、他方でその把捉・把握という形で、直観(単なる直観)と知覚とを区別しているのである。

## IV

以上で、“単なる直観”、“盲目の直観”が現象の根源的所与性を意味することが明らかになったと思うので、最後に“現象の根源的所与性”について考えてみたい。ここで“現象”とは何を意味するのだろうか。

可能な解釈として、二つ考えられる。(a) “現象”とは、対象から区別された意味での表象 (Vorstellung) である。しかし、表象は私の意識内容として私に属する。私に直接与えられているのはこの意識内容、あるいは一般に心的内容であって、対象ではない。対象は直接与えられるのではなく、ただ悟性によって、表象を素材として構成されるにすぎない。この対象へと悟性は表象を関係づけるのであって、この悟性の働きを離れては、表象(直観)は対象への如何なる関係ももたない。したがって、それは主観的 (subjektiv) 私的 (privat) <sup>(39)</sup> である。

しかし、次のように考えることもできる。(b) 感性が根源的に呈示する“現象”とは対象であって、対象から区別された意味での単なる表象ではない。対象(現象)を根源的に呈示するものとして感性は、従ってまた直観は一般に根源的に対象に関係している。感性こそ、対象への関係の根本能力であり、それに対して悟性は対象の把握、その認識の能力であるにすぎない。

この二つの解釈のうち、私は第二の解釈を取る。その根拠づけを本稿の最後の課題としたい。

先ず、第一の解釈の根拠について調べてみよう。この解釈はテキストの多くの箇所から正当化されうるように見える。

① A104でカントは、現象は「感性的表象にすぎない」(nichts als sinnliche Vorstellung) <sup>(40)</sup> と、はっきり述べている。そしてA105で、対象を「我々の凡ての表象から区別された何か」(etwas von allen unsern Vorstellungen Unterschiedenes) <sup>(41)</sup> として表象に<sup>(41)</sup>対置しながら、我々はただ表象を扱いうるのみである、と述べている。“現象”はこの表象と看做されているのである。

② カントは感性を、“対象からの触発を通して表象を受け取る能力”として捉えているが、<sup>(42)</sup>しかるにこの“表象”(Vorstellungen)について、次のように述べる。表象は心の規定ないし変様 (Bestimmungen/Modifikationen des Gemüts) であり、かかるものとしてそれは私の内的状態、内感に属する。<sup>(43)</sup>感性が与えるのはあくまでこの表象であって、対象ではないのである。この点をカントはカテゴリーの演繹遂行の根本的前提として<sup>(44)</sup>いる。——『プロレゴメナ』では、更にはっきりと現象・直観・知覚は「主観的表象様式」(subjektive Vorstellungsart) にすぎ<sup>(45)</sup>ず、「その妥当性は単に主観的である」(deren Gültigkeit bloß subjektiv ist) <sup>(46)</sup>とされている。。

③ カントは『純粹理性批判』の随所で、一方で現象・直観・表象、他方で対象という対比を考えた上で、悟性の機能を次のように捉えている。悟性は前者(現象・直観・表象)を後者(対象)へと結びつける (beziehen) <sup>(47)</sup>。あるいは、前者に対して対象を規定 (bestimmen) ないし思惟する (denken) <sup>(48)</sup>。あるいはまた、前者を使って後者(対象)を規定<sup>(49)</sup>する。——これらの表現に於いて、現象・直観は明らかに対象に対置され、しかもそれは悟性の機能を通して始めて対象に結びつけられ対象認識の手段として使われるのであ



て、悟性のこの機能を欠くもの、即ち“単なる直観”としては対象への如何なる関係ももたないと考えられている。<sup>(50)</sup>

以上から、解釈 (a) を採ることは必然的であるように見える。しかし、私はそうは考えない。

(1) 先ず ① だが、そこで確かに現象は感性的表象にすぎないと言われているが、“感性的表象にすぎない”とはどういう意味なのか。心的内容という意味にこれを取ることもしできるが、しかし次のように取ることも可能である。現象は確かに対象である、しかしそれは我々の表象作用の外にある“物自体”ではなく、我々に表象される（そしてこの表象は先ず感性を通して行われる）限りでの対象である。——実際、カントはしばしばこの意味で、現象は表象にすぎないと言う。例えば感性論では、「我々が外的対象と呼ぶものは我々の感性の単なる表象にすぎない」(A30/B45) と言っている。ここで対象が、しかも外的対象が、感性の表象にすぎないと言われている。弁証論でもカントは次のように言う。「ところで外的対象（物体）は単なる現象であり、従ってまた私の表象の一種に他ならない。表象の対象はこの表象を通してのみ何かであるのであって、表象から切り離されれば何ものでもない。」(A370)

A104-5についても、同じことが言えるのではないか。現象が感性的表象にすぎないとは、それが「(表象力の外にある) 対象」(Gegenstände (außer Vorstellungskraft)), 即ち物自体ではなく、感性によって表象される限りでの対象であることを意味する。A109では、「現象は物自体ではなく、それ自身単なる表象である」(Nun sind aber diese Erscheinungen nicht Dinge an sich selbst, sondern selbst nur Vorstellungen) とはっきり言われている。我々にとって対象とはこの現象しかない。従って、たとえ現象とは別に対象を考えてみても（即ち“表象力の外にある対象”を考えてみても）、それは「我々にとって無」(für uns nichts) であるのである。(A105)

(2) しかし、それにも拘らず、カントは表象と対象（但し最早“物自体”ではなく、我々の認識の対象である）とを区別し、しかもこのうち表象を心の単なる規定・変様として内的状態、内感に属するとしている。この点についてはどうだろうか。

先ず、次の点に注意しなければならない。表象に関しては表象作用、表象内容、対象の三つを区別する必要がある。このうち表象作用が私に属することは明白である。更に、表象内容も、私の表象の仕方を表わすという意味では私に属している。この限りでは表象は確かに私の心の規定・変様として内感に属すると言える。しかし、対象についてはどうだろうか。対象すら私に属するとは必ずしも言えない。外的対象の表象が可能だからである。実際カントは外的直観・外的知覚という形で、外的対象の表象を認めている。外的直観・外的知覚も上の意味では心の規定・変様として内感に属している。しかしそれは同時に外的対象に関係している。

但し、これに対しては、次のような仕方で解釈 (a) の擁護を計ることが可能である。こ

ここで言う外的直観・外的知覚は已に悟性機能を含んでおり、これに基づいて対象に関係しているのであって、従ってそれは“単なる直観”ではない。“単なる直観”を取り出すためには、外的直観・外的知覚から悟性機能、従って対象への関係を分離しなければならない。こうして“単なる直観”としては、主観的・私的表象、意識内容のみが残る。

これに対して、私は次のように応えたいと思う。上の解釈では、意識内容と対象認識とを対比した上で、感性が前者を与え、悟性が後者をもたらす、と考えている。しかし、なぜ意識内容は主観的・私的と看做されるのか。答は明白である。悟性のもたらすものとして対象の客観的認識を考えた上で、それは意識内容を悟性が加工することによって始めて可能となると考えているからである。こう考えるとき、意識内容は確かに悟性の加工を欠くものとして客観性をもたず、主観的 (subjektiv) と看做されるしかない。更に、客観性を間主観性と等置すれば、意識内容は私的 (privat) と看做されるしかない。また、対象への関係を、対象の客観的認識という意味に取れば、意識内容が対象への関係を欠くことも言うまでもない。

但し、次の注意が重要である。意識内容はここで、単に私の状態として捉えられているのではなく、同時に始めから何かを表象するものとして捉えられている<sup>(51)</sup>。何かを一定の仕方<sup>(52)</sup>で表象するものだからこそ、その妥当性 (Gültigkeit) が問題となり、しかし客観的、あるいは間主観的妥当性をさしあたり欠くものとして、それは主観的・私的と看做されるのである。カント自身、『プロレゴメナ』及び『純粹理性批判』第二版の演繹論に於いて、主観性をこの意味で理解している<sup>(53)</sup>。

従って、次のように言うことができるであろう。上の直観理解に於いては、対象の客観的・間主観的認識を基準にして凡てが考えられている。先ず、対象への関係は対象の客観的・間主観的認識と等置される。次に、対象の客観的・間主観的認識は悟性によって始めて可能であるという考えに基づいて、対象への関係は専ら悟性に基づく主張される。更に直観・意識内容については、対象の客観的・間主観的認識が基準となっているために、それは一方で単なる心の状態としてではなく、何かを表象するものとして、この意味での“表象” (Vorstellung) として、従ってその妥当性が問題となるものとして捉えられているが、しかし他方で悟性機能を伴わないために、それは対象への関係を欠き、単に主観的・私的妥当性を有するにすぎない、と主張される。

この結論自体は不当なものではない。しかし、カント解釈としては一面的だと私は言いたい。何よりも先ず、それは“対象への関係” (die Beziehung auf den Gegenstand) を狭く取っている。そのために、カントの直観論の重要な面が見落されている。

上の解釈では、“対象への関係”は、対象を客観的に認識することとして理解されている。この意味での対象への関係を直観が、そして感性がもたないことは言うまでもない。それをもつためには直観は悟性によって対象へと関係づけられなければならない。カント自身、“直観を対象へと関係づける”とか、“直観に対して対象を規定する”とか言うとき

には、<sup>(54)</sup>このことを考えていたと思われる。しかし、“対象への関係”を、我々はもっと根本的な意味で取る必要がある。感性・直観は一切の悟性機能に先立って対象に根源的に関係し、この関係に於いて我々に根源的に対象を呈示する——こういう“対象への関係”概念をもつ必要がある。カント自身これをもっていただと思われる。

カントはデカルト・ライプニッツと違って、我々の感性に、内感だけでなく、本質的に外感が属すると考え、<sup>(55)</sup>両者を不可分のものとして捉えている。<sup>(56)</sup>のみならず、外感こそ我々に認識の質料を根源的に与えると考える。<sup>(57)</sup>ここで外感<sup>(58)</sup>は認識の質料の提供者として、対象（外的対象）に根源的に関係すると考えられている。この外感を我々の感性は本質的に含むのである。従って、感性は根源的に対象（外的対象）に関係している。対象へのこの根源的關係を感性に認めるからこそ、カントは感性の形式と現象（対象）の形式とを同一視し、従って現象（対象）の形式は「心のうちにア・プリオリに備っている」（im Gemüte a priori bereitliegen）と主張するのである。<sup>(59)</sup>のみならず、対象への根源的關係を感性に認めるからこそ、感覚についても、それは一般に対象の現実性を「前提」（voraussetzen）し、「表示する」（bezeichnen）と言ひ、<sup>(60)</sup>更に知覚については、対象の現実性を「直示」（anzeigen）あるいは「直接証明する」（unmittelbar beweisen）<sup>(61)</sup>と言うのである。また、感覚・知覚の実質についても、それを基本的に対象に帰属可能なものと看做す。<sup>(62)</sup>これらのカントの主張は、感性に対象への根源的關係を認めていなければ不可能であつたらう。

但し、上のことは一般に対象が存在し、それを我々は何らかの仕方で知覚しうると言っているだけであつて、具体的に我々がどの、あるいはどういう知覚をもっているのかということまで示すものではない。<sup>(63)</sup>具体的に知覚、対象の認識が成立するためには、統覚の総合的統一が実際に働いて経験の統一が形成される必要がある。<sup>(64)</sup>しかし、経験の成立のためには統覚の統一だけでは不十分であつて、そのためには感覚、その実質、感性の形式が、もともと本質的に上述の性格をもっていなければならないのである。そしてこのことは感性の、対象への根源的關係なしには不可能である。

我々の結論はこうである。感性は一切の思惟機能、統覚の総合的統一に先立って、我々に現象（対象）を根源的に呈示する。これが本来の、根本の意味での“直観”であり、カントはそれを“単なる直観”（bloÙe Anschauung）と呼んだ。空間・時間（直観Ⅰ）はまさにその直観の純粹形式であり、それはかかるものとして我々に根源的に与えられている。一切の悟性機能、従ってまた悟性の根本概念とされるカテゴリーは、対象へと関係するためには、この直観、そしてその純粹形式である空間・時間（直観Ⅰ）に関係しなければならない。この関係を欠くとき、一切の思惟並びにカテゴリーの客観的実在性は潰滅するであらう。

この結論が正しいとすれば、そこからカテゴリーと原則の演繹という『純粹理性批判』の中心的課題の解決に向けて、新しい展望が開けてくるはずである。現象・空間・時間の

根源的所与性を解明し、それとカテゴリー・原則との関係を究明すること、ここに我々の新しい課題がある<sup>(65)</sup>。この課題が解決されるとき、カントの超越論的哲学はその根拠づけを見出すであろう。

註

- (1) B41, A26/B42, A30/B46, A42/B59f.
- (2) A20/B34, A22f./B37, A26/B42, B66f., A87/B118.
- (3) A20/B34. 他にA25/B39参照。— “多様”の二義性については註(28)参照。
- (4) A25/B39, B40, A31f./B47f.
- (5) B40. 部分を“含む”ことが、その綜合を意味するという点についてはB160参照。
- (6) A25/B39.
- (7) A25/B39, A32/B47f.
- (8) B136Anm. 参照。
- (9) 全体表象が直観でない場合の例としては、さしあたり因果関係の把握を考えておけばいいであろう。
- (10) 「盲目」ないしそれに類する表現は以下の箇所でも使用される。A78/B103, A112, A625/B653, A772/B800. —このうち最初の二つは構想力について言われる。“盲目の直観”の場合との意味の異同については、ここでは立ち入らない。
- (11) A50-2/B74-6.
- (12) A20f./B35, A22/B36.
- (13) B40, B41, A31/B47. 他にA89/B121参照。
- (14) A22/B36, B40.
- (15) A38f./B55.
- (16) A89/B121でカントは空間・時間の直観を「ア・プリオリな認識」(Erkenntnisse a priori)と看做しているが、これは文脈から言って、むしろ“ア・プリオリな表象”を意味するであろう。A87/B119参照。
- (17) A25/B39.
- (18) B161f.Anm.
- (19) A78f./B104.
- (20) A99f., A101f., A105, B136Anm., B137f., B144Anm., B154f., B160f.(Anm.)
- (21) A99f., A101f., B160f.Anm.
- (22) B136Anm., B144Anm., B154f.
- (23) A105, B137f., B160f.
- (24) A126f.他にA105f., A108.
- (25) A143/B182, B202.
- (26) Vgl. *Prolegomena*, §20 (IV301f.)
- (27) A110, A117Anm., A127. 他に, A253/B309, *Prolegomena*, §20 (IV301) 参照。但し, A180/B223では, 直観Ⅲの意味で言われている。(B207では, „reine (bloß formale) Anschauungen“ と言われている。)
- (28) カントは他に次の表現も使う。„das Mannigfaltige der Anschauungen“, „das Mannigfaltige der Vorstellungen“, „das Mannigfaltige der Erscheinungen“, „das Mannigfaltige

der Wahrnehmungen“, „mannigfaltige Vorstellungen“, „verschiedene Vorstellungen“——本文中のものも含めて、これらの表現の現われる箇所として、さしあたり以下を挙げておく。A77-9/B103-5, A97, A99, A100-2, A103, A105f., A108, A110, A112-4, A116f., A120-2, A127, B129, B132-6, B136f., B138, B142, B143, B150f., B152, B154f., B161, B164f., A162f./B203f., A176f., B218f., A177f./B220.

§ 10 の冒頭で、カントは「感性のア・プリオリな多様」(ein Mannigfaltiges der Sinnlichkeit a priori), 「純粹直観のア・プリオリな多様」(ein Mannigfaltiges der reinen Anschauung a priori) と言っている。(A76f./B102)あるいは初版の演繹論では、「如何なる直観もそれ自身のうちに多様を含んでいる」(Jede Anschauung enthält ein Mannigfaltiges in sich) (A99) とも言っている。同様に「感官はその直観のうちに多様を含む」(er (der Sinn) in seiner Anschauung Mannigfaltigkeit enthält) (A97) とも言う。この“多様”が何を意味するのだが、一般に“多様”の可能な意味として二つを区別すべきだと私は思う。(i) 一つは異なるものとして把握・区別されていない多様(多様I), (ii) もう一つは異なるものとして把握・区別されている多様(多様II)。

通常“多様”について語る場合、我々はそれを予め多様として意識しており、この場合多様を実は何らかの仕方(たとい十分に明確にはなくとも <A77/B103参照>) 已に区別している。即ち多様IIを理解している。しかし、他方で多様Iの存在も認めるべきであろう。例えば空間の場合がそうである。確かに我々は空間の中に“部分”(Teile)を区別する。(部分は多様IIである。)しかし、カントが感性論で説くように、空間は元来は部分に先立つ「本質的」であり、しかもそこには予め多様が含まれている。この多様は“部分”ではなく、“部分”のように互いに区別されてはいない。即ちそれは多様Iである。(Vgl. A426 Anm./B454 Anm., A513/B541, A526/B554)

このように、カントの空間(そして時間)論から言って、“多様”を多様Iの意味で理解する可能性は残されているのであるが、しかし実際にはカントは上の様々の例から解るように、“多様”を多様IIの意味で理解している。A97では明らかに、そしてA99でも恐らく、彼は“多様”を多様IIの意味で理解している。もっと明確なのは§ 10である。ここでカントは、認識は総合を通して始めて可能であるという理解に立った上で(A77/B102, A77/B103——なお、この認識理解はA97で再登場する)、“総合”(Synthesis)を、「異なる表象を互いに付加し、その多様を一つの認識のうちで把握すること」(verschiedene Vorstellungen zu einander hinzuzutun, und ihre Mannigfaltigkeit in einer Erkenntnis zu begreifen) (A77/B102) <傍点筆者>として捉えている。総合はここで「諸表象の総合」(Synthesis der Vorstellungen) (A78/B104) <傍点筆者>を意味するのである。カントは已に感性論で「現象の多様」(das Mannigfaltige der Erscheinung)を多様IIの意味で理解していた。この点については本稿Iで触れた。この多様理解が§ 10に受け継がれているのである。同様のことはA98f.及びB129f.についても言える。この二つの箇所でカントが§ 10と同様に“多様”を多様IIの意味で取っていることは重大である。なぜなら、この二つの箇所は、カテゴリーの演繹の出発点をなしているからである。カテゴリーが総合に統一を与えるという場合の“総合”は、多様IIの総合を意味するのである。

なお、カントは線を引くという形での総合について幾度となく取り上げるが(A102, B137f., B154-6, A162f./B203f.), そしてこの総合は根本的にはベルグソンも言うように(Bergson, H., *La pensée et le mouvant*, pp. 158-9) 多様Iの総合として理解されるべきであるが、カントはここでは“多様”を“部分”(Teile)として捉え、総合を部分から部分への「継次的総合」(sukzessive Synthesis)として捉えている。

(29) A115. 他にA89-91/B122-3参照。——これらの箇所は、さしあたり知覚の、悟性機能から

の独立性を認めているのと解するのが一番自然であろう。

- (30) カントの“知覚”概念は、総合との関係に関して二義的である。(対象への関係に関する二義性はここで取り上げない。)知覚は総合の素材と看做されることも、総合の所産と看做されることもある。引用文では、知覚は総合の素材と看做されている。A121-2の文章から、このことは明白である。A110, A115, B147も“知覚”をこの意味で取っている。他に、もっとも顕著な例としては、「経験の類推」中の“知覚”を挙げるができる。——それに対して、“知覚”を総合の所産として見ている例としては、さしあたりA120Anm., B160, B162, B203を挙げておけばいいであろう。B161では“知覚”が単数と複数で一度ずつ使われるが、単数の場合は総合の所産、複数の場合は総合の素材と見られている。
- (31) A119f.
- (32) A116, A120, A122, B202.
- (33) これは以下の箇所でのカントの主張の骨子を示したものである。A106-8, A116-23, B131-5。——これらの箇所でのカントの議論の核心は「一つの意識/自己意識に属する」(zu einem Bewußtsein/Selbstbewußtsein gehören) (A116, A117Anm., A122, A129, B132) という表現にあると思う。類似の表現として „mir angehören/zugehören“ (B132f., B134) がある。これらの表現は、意識の本質的综合性に基づいて、次の表現に置換可能である。„in einem Bewußtsein/Selbstbewußtsein zusammenstehen/vereinigen“ (vgl. B132, B134) 即ち“意識に属する”とは、何らかの仕方で意識に於いて総合されることを意味する。もっとも、この総合は多くの場合不明瞭、薄弱であり、それとしては余り意識されていないであろう。(vgl. A103, A106, A117Anm., B132, B134) しかし、それだけに逆にこの総合は根本的である。この総合をカントは「根源的結合」(ursprüngliche Verbindung) (B133) と呼ぶ。——こうして、カントは次のように主張する。「……凡ての現象は例外なしに、統覚の統一に合致するように心のうちへと受け入れられ、即ち把握されなければならない」(……müssen durchaus alle Erscheinungen, so ins Gemüt kommen, oder apprehendiert werden, daß sie zur Einheit der Apperzeption zusammenstimmen) (A122)
- (34) A76f./B102, A100, 他にA90f./B123.
- (35) 但し、A111には „zwar gedankenlose Anschauung, aber niemals Erkenntnis, also für uns soviel als gar nichts“ という表現が見られる。
- (36) B132の „eine notwendige Beziehung auf das: Ich denke“ も同じ意味で言われている。但し、A111f., B140, B142では、別の意味で統覚の総合的統一への関係が言われている。即ち、統覚の総合的統一の制約下にあるという意味で言われている。なお、„können“, „Möglichkeit“については以下も参照。A116, B134.
- (37) B162でもカントは(経験的)直観と知覚とを区別している。
- (38) 現象が知覚されるべく我々に与えられる、と言う場合、現象の知覚可能性が前提されている。
- (39) 認識の対象への関係に関して悟性の優位を説く立場は、大なり小なり直観をこう捉える。新カント派の他に、以下のものがそうである。  
Smith, N.K., *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, 2. ed. 1923, pp.79-84.  
Cassirer, H.W., *Kant's First Critique*, 2. ed. 1968, p.28, p.60.  
Stegmüller, W., *Gedanken über eine mögliche rationale Rekonstruktion von Kants Metaphysik der Erfahrung*, in: *Aufsätze zu Kant und Wittgenstein*, 1974, S.14.  
Prauss, G., *Erscheinung bei Kant. Ein Problem der „Kritik der reinen Vernunft“*, 1971, S. 11, S.185f., S.233Anm., S.244.
- (40) 他にA108f., A250参照。

- (41) 他にBXLII参照。
- (42) A19/B33, A50/B74, A51/B75.
- (43) A28, A34/B50, A50/B74, A97, A98f., A101, A129, B139, *Prolegomena*, §13 Anm. II (IV289).
- (44) A99.
- (45) *Prolegomena*, §13 Anm.III (IV291).
- (46) *op. cit.*, §21[a] (IV304). 『純粹理性批判』第二版にも同様の考えが認められる。B139f., B142.
- (47) BXVII, A247/B304, A250, A253. Vgl. auch VI211 Anm.
- (48) A50/B74, A106, A108, A111, 他にA51/B75 („den Gegenstand sinnlicher Anschauung zu denken“)
- (49) BXVII
- (50) A253/B309. Vgl. auch XI 311.
- (51) 例えば感情はこの意味での“表象”ではない。それは単に私の状態であるにすぎない。Vgl. B67, A801Anm./B829Anm.
- (52) „subjektive *Vorstellungsart*“ (IV291)〈強調は筆者〉
- (53) 註(46)参照。
- (54) 註(47), (48), (49), (50)参照。——なお，“直観の、対象への関係づけ”という概念自身、実は二義的である。それは一般に直観から判断への移行を意味しうるとともに（この場合、判断は偽でもいい）、特に真なる判断の形成という意味でも使われる。“関係づけ” (*beziehen*) をカントが第一の意味で理解している箇所として、さしあたりA58/B83, IV290を挙げておく。
- (55) A22/B37, B276f.Anm.
- (56) BXLII Anm.
- (57) BXXXIX Anm., B67.
- (58) 「外感とは己にそれ自身直観の、私の外の何か現実的なものへの関係をいう」(*der äußere Sinn ist schon an sich Beziehung der Anschauung auf etwas Wirkliches außer mir*) (BXL Anm.)
- (59) A20/B34. —従って、カントを単なる“主観主義者”と看做すことはできないと私は思う。カントを主観主義者と捉えた上で、客観主義・実在論の立場からカント批判を試みたものとして、特に以下を参照されたい。岩崎武雄『カント「純粹理性批判」の研究』、量義治『カントと形而上学の検証』そこで空間は「主観から独立に存在する実在的なもの」(量178頁、なお岩崎65頁も参照)、「物の現存在カテゴリー」(量140頁, 166-7頁, 178頁)として捉えられている。この空間理解との対決は有益だと思われるが、ここでは割愛するしかない。
- (60) A50/B74, A373f., —Vgl. auch, *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, § 3, § 4, §11. (II 392f., 397)
- (61) A373, A375.
- (62) B69f.Anm. 他に以下の表現・文章参照。  
 „die Empfindung (als Materie der Wahrnehmung)“ (A167/B209)  
 „Denn Wahrheit oder Schein sind nicht im Gegenstande, sofern *er angeschaut wird*, sondern im Urteile über denselben, sofern *er gedacht wird*.“ (A293/B350) 〈強調は筆者〉  
 „Allein dieses Materielle oder Reale, dieses Etwas, was *im Raume angeschaut werden soll*“ (A373) 〈強調は筆者〉  
 „Freilich ist der Raum selbst, mit allen seinen Erscheinungen, als Vorstellungen, nur in mir, aber in diesem Raume ist doch gleichwohl *das Reale, oder der Stoff aller Gegenstände*

*äußerer Anschauung, wirklich und unabhängig von aller Erdichtung gegeben*“ (A375) <強調は筆者>

„Und da liegt es gar nicht an den Erscheinungen, wenn unsere Erkenntnis den Schein für Wahrheit nimmt, d.i. wenn Anschauung, *wodurch uns ein Objekt gegeben wird*, für Begriff vom Gegenstande oder auch der Existenz desselben, die der Verstand nur denken kann, gehalten wird“ (IV289f.) <強調は筆者>

„Die grüne Farbe der Wiesen gehört zur *objektiven* Empfindung, als Wahrnehmung eines Gegenstandes des Sinnes“ (V206)

他に, VI211f. (Anm.), VII154参照。

但し, 感覚あるいは知覚の実質の対象への帰属可能性については, カントの記述には動揺が見られる。対象への帰属可能性に対して否定的な箇所としては, 例えばA28f., A45/B62, IV299がある。この点についての整合的解釈は可能だと思うが, ここでは立ち入らない。

(63) B278f.

(64) BXLI Anm., A230/B282f., IV290Anm.

(65) 空間・時間の根源的所与性については, かつて取り上げたことがある。拙稿「知覚と統覚(八)」(富山大学教養部紀要第18巻2号, 人文・社会科学篇) 参照。